

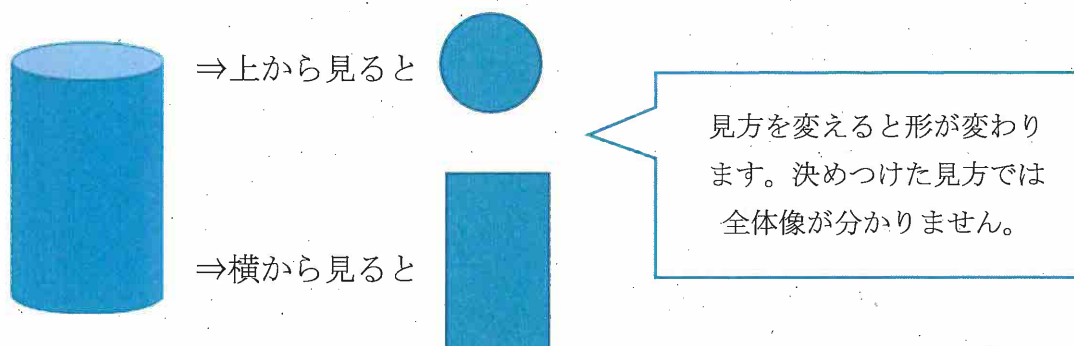
目指す児童像 『自分で考え、よりよい判断ができる子ども』

アリの目・鳥の目・魚の目

タイトルは物事の見方を表す時によく使われるフレーズです。「アリの目」とは物事を近くに寄ってつぶさに詳しく見ることです。「鳥の目」とは視点を高くし、物事の見える範囲を広くすることです。そして「魚の目」とは自分の周囲へ視点を張り巡らすことです。

さて、「アリの目」では詳しく物事を見ることができますが、全体像はわかりにくくなります。「鳥の目」は広く、全体を見渡すことができますが、物事の詳細は見えにくい状態です。「魚の目」は周りの様子はわかりますが視界は決してよくはありません。

つまり、物事を見る視点を一通りしかもたないと、正しい判断ができないことがあります。子どもたちを見る視点も様々な角度から見ることで、子どもたちのよりよい成長を促す言葉かけや指導ができるのではないかなあと考えています。



小体連



去る10月29日、6年生が小体連に出場しました。走ったり、跳んだり、投げたりする競技を通して、諫早市内の他の6年生と交流を深めました。

競争をするわけですから、勝敗がつきます。悔しい思いをした子もいたと思います。しかし、陸上競技は他と競うばかりでなく、自分と競うことができる競技でもあります。このことは小体連の壮行会でも6年生に話をしたところです。

今夏のパリオリンピック女子やり投げの金メダリストは、65m80という他の追隨を許さないビッグスローで見事頂点に輝きました。しかし、その選手は「金メダルはとっても嬉しい、でも自分の目標である70mに到達できるようこれからも頑張りたい」とインタビューに答えられていました。

単に他との優劣を競うばかりではなく、自分への挑戦をする姿勢は結果として自分を多くの意味で成長させるのだらうと感じます。小栗小の6年生の多くが自分への挑戦に躍動していた姿が素晴らしいと感じました。

